

東北関東大震災 今、私たちにできること

3月11日(金)午後2時46分頃、三陸沖を震源とする、マグニチュード9.0の大地震——東北地方太平洋沖地震が発生した。最大震度7を記録し、巨大津波を引き起こした。また、12日には長野県、15日には静岡県で、ともに最大震度6強の地震も発生。24日午前8時現在の政府発表による人的被害は、1都1道17県で死者9,523人、行方不明者16,067人、負傷者2,755人、避難をしている人は257,063人。

被災地では、今も余震が続く中で救助活動と被災者援助活動、福島第一原子力発電所事故の沈静化にむけた作業が懸命に続けられている。

甚大な災害を前に私たちは、被災地のために何ができるだろうか。そしてこの震災を教訓に、今後何ができるのだろうか。

被災地の姿は、さまざまなメディアを通じて毎日届けられている。解決したい問題が山積している被災地のために、何かできることがないか、日々心を痛めている人も多いだろう。

今、私たちができること。それは被災地を「支える」とこと、私たちの日常を防災という視点で「見直す」ことではないだろうか。

支える。

今、私たちにできること

義援金

被災地と被災した人たちをあらゆる方向から、即座に支えられるのが義援金だ。被災した人たちに確実に届けられるように、信頼できる手段を活用したい。

献血

震災直後から多くの人の協力が寄せられ血液は充足状態にあるが^{※1}、採取した血液には使用期限がある^{※2}。継続的な血液の供給のため、一人の頻度だけでなく、献血をする人の輪を広げていくことも支援に繋がる。(市内の4月の献血日程は21ページ)

見直す。

今、私たちにできること

備える

避難時に持ち出す物品や避難経路の確認に加え、地域で行う救助活動を見直したい。防災意識を高め、互いに助け合う土壌を培う自主防災組織。地域に根差した活動は、いざという時に迅速に命を助ける有効な手段だ(広報あらお2月1日号参照)。自主防災組織の設立などについての問合せ先

くらしいきいき課
☎ 63・1395

物資・ボランティア 個人的な

援やボランティアは、受け入れ態勢が整っていない場合、却って被災地に負担をかけることに繋がる。今は必要とされる支援ができるように態勢が整うのを待ちたい。

続ける

復旧が進むにつれ、多様な支援が必要になると考えられる。今できる支援に加え、復興にかかるであろう長い期間、「続ける支援」を考えたい。

荒尾市ではこんな支援も行っています (3月25日現在) 詳しくは市ホームページに掲載しています
▼水道局：給水支援のため、宮城県村田町に職員2人と給水車1台を派遣(3/18～10日間)
▼市民病院：透析患者の受入態勢有▼荒尾競馬：荒尾での開催日(3/17・18・26・27)の第5レースを「東日本大震災復興支援競走」とし、手数料と経費以外の売上を全額義援金として寄付▼毛布などの物資支援準備▼市営住宅提供準備▼義援金募金箱の設置 など。

市内の主な義援金募金箱設置施設 (順不同・3/24現在。匿名または領収証不要の場合)

荒尾総合文化センター	児童センター	運動公園管理事務所
メディア交流館	働く女性の家	市民体育館
みどり蒼生館	荒尾中央公民館	体育センター
小岱工芸館	市立図書館	荒尾競馬場
市役所総合案内	万田坑ステーション	観光物産館
市民サービスセンター	万田炭鉱館	あらおシティモール
人権啓発センター	宮崎兄弟の生家施設	

義援金についてのお問い合わせ

福祉課

☎ 63-1406

※募金は、日本赤十字社を通じて被災地へ送ります。

義援金の振込 (領収証が必要な場合。後日郵送でも可の場合は、市役所福祉課でも受け付けます)

	口座名義	口座番号
日本赤十字社	日本赤十字社 東北関東大震災義援金	00140-8-507
中央共同募金会	中央共同募金会 東北関東大震災義援金	00170-6-518

郵便局、コンビニエンスストアなどで振り込みができます。福祉課での募金は日本赤十字社を通じて被災地へ送ります。

※1 日本赤十字社九州ブロック赤十字血液センター連盟ホームページより九州の状況 (3/24現在)
※2 採血後、赤血球製剤で21日間、血小板製剤で4日間、新鮮凍結血漿で1年間。(上ホームページより)
また、震災名はNHKで使用されている名称に統一して掲載しています。

被災の現場から

有明広域行政事務組合消防本部緊急消防援助隊



警防情報指令課主幹
阿野木 賢信

「現場は、想像を絶しています」
その言葉はとても重く響いた。有明広域行政事務組合消防本部は、3月14日から23日まで、2隊に分けて緊急消防援助隊を被災地に派遣した。同援助隊は、宮城県仙台市若林区や塩釜港周辺で、行方不明者の捜索や消火活動に従事した。阿野木賢信警防情報指令課主幹は、1次隊指揮隊長として現地に赴いたときに撮影された写真を見せてくれた。
「まるで映画のようというか……これが現実なのか、と思いました」写真には、かつてまちがあった場所が荒涼とした黒い平原と化した様子、車などが横転し、家屋の屋根に載っている様子、瓦礫と津波の水が残る地面——そして降りしきる雪の中で活動する隊員の姿が切り取られていた。
災害現場は見慣れていた。凄惨な現場があることを想像し、覚悟して出かけたつもりだった。しかし、現実には凄まじかった。
「現場を見て、涙が出ました」と阿野木主幹。涙が出ては仕事ができないうと、懸命にこらえて活動したという。
「行方不明者の捜索もあったが、主に工場倉庫の火災の消火にあった。場所は地震発生から1週



▶3月24日(木)、各隊の隊長が報告に前畑市長を訪ねた。

間、手段もなく人手も足りず、手つかずになって燃え続けていた。外から水をかけるだけでは消火できない。燃えている資材を重機や人力で取り出し、一つ一つに放水し消火する、地道な作業だった。消火水の調達には苦労したが、こちらから持っていくた大型水槽車がとても役立つたという。
隊員の中には、PTSD(心的外傷後ストレス障害)の症状がみられる人もいるという過酷な現場だった。しかし被災した人たちの優しい気遣いに救われた。
「本当に温かい声をかけていただきました。だからこそ、被災地のためにがんばろうと思えました。お陰で全員けがもせず帰ってこれました」
このまま帰ってもいいのか——。まだ手つかずの場所が数多く残る被災地を去るとき、そんな思いがよぎったという。

荒尾市水道局緊急援助派遣



局長補佐兼工務係長
井上 一樹



工務係主任
小宮 智和

18日(金)、宮城県村田町へ給水活動のために出発した水道局の井上一樹局長補佐と小宮智和主任。活動を続ける小宮主任に、電話で現地の様子を聞いた。
「村田町は断水以外では被害が比較的少なかった町です。一般の人のためのガソリンが不足気味ですが、それ以外では復旧のめどが立ちつつあります。
20日の昼に到着しましたが、19日には電気が復旧していました。23日からは一般家庭の水道が町の中心地域で復旧し始めています。しかし山に近い所など、場所によっては時間がかりそうです。
高速道路は壊れたところを補修しながら、時速50キロメートルに速度を規制し、災害派遣緊急車両だけが通行しています。
被災地方面から帰る車両は消防自動車が多く、向かう車両はパトカーが多かったです。今後は治安維持などの支援も必要になるのかなと感じています」

つながる心、つながる命

「災害は常に予想を超えている」——それは防災の現場では、当然の認識であるだろう。しかしその予想と認識をさらに上回ったのが、このたびの東北関東大震災だったのではないだろうか。発生から半月経った今も、被害の全容は分かっていない。

今後は被災地が立ち上がるのを、日本全体で支えていかなければならない。震災で大きな被害を受けた被災者の皆さんを支えながら、ともに一日も早い復興を目指していかなければならない。

その一方で、今後の災害で命を落とす人が一人でも減るように、防災に対する意識を高めておきたいと思う。

私たちが住む荒尾にも、予想を超えた災害が起こりうる。江戸時代には荒尾を、6メートルの津波が襲った。今後も絶対に起こらないとは、誰も言いきれない。

災害が起こった時、大きな力を発揮しているのは、思いやりや人と人とのつながりだと実感した人は多いだろう。人と人とのつながることで、多くの人の命が繋がっていく。

被災者の皆さんと心をつなげ、長く支援を続けること、地域でつながり、災害から身を守ること——私たちの中にあるつながる力は、命を守る力ギとなる。震災を教訓に、その力を活かしていきたい。(C)